

引揚げ・満州避難民収容所の思い出

嘉徳郡桂川町 大野 節子

私たちは一家は元満州国通化省八道江というところで敗戦を迎えた。当時父は東辺道開発株式会社の調査班長として、東辺道の最辺境の街琿春の事務所で仕事をしていました。私は奉天の女学校を44年に卒業し、八道江の興農合作社に勤務していました。

中学生と小学生の2人の弟達と母の4人が暮していたが、45年5月頃より空襲があったり、戦局が悪化し始めると日本人は各職場から閉め出されるようになり、間もなく父も若い二組の夫婦を連れて帰ってきた。それから家の前を関東軍の将兵を満載したトラックが南下するのが何日も続いた。一緒に連れて行ってくれといった日本人家族もいたそうだが、南方や朝鮮に移動するのだと言って、ほとんどほこりを巻き上げて素通りして行った。

8月になってソ連の参戦が伝わってきた。チチハル、ハルビンはもとより牡丹江、東寧へと侵攻して東辺道を戦車で進んでくるさまが伝わってくる。関東軍も闘わずして逃げたとか、ソ連兵はシベリアに送られた囚人兵で、娘や若い女性を見つけるとトラックに引きづり上げて暴行をするとか、まことしやかに流言が広まり、恐怖のためノイローゼになった女の人もいた。

ある日、若いソ連兵が2名、街を歩いてくる。近所には日本人家庭はなく、中国人たちのざわめきがしたかと思うと彼等が入ってきた。板ばりも畳の上も長靴のままどかどかと歩き回って、家中を物色しているようだ。父母は彼等について回り、母はエプロンの下に出刃包丁を隠して目を離さない。炊事場の隅に隠れていた私たち3人も、いざというときはと思って包丁を持っていた。ふと窓の外に目をやると、子どもや大人たちが大勢家の中をのぞいていた。さすがに兵隊たちは何もせず声高にしゃべりながら出て行った。

無気味な毎日だったが、数日後敗戦となったらしい。私たちは「玉音放送」も聞かれず、敗戦日を誰からも教えられなかった。忘れもしない1945年9月20日、中秋の名月の夜である。ささやかな月見をしようと同居の人達も全部集めての夕方6時頃、山ぶどうの実で作った母の手作りのぶどう酒を持ち出して夕食のテーブルを囲む。肥った父は湯上がりで上半身は裸でうちわを使っていた。

そんな時に「掌櫃大変だ、暴民が襲ってくる、隠れろっ」と中国人の男が飛び込んできた。父は「謝々、今どの辺に来ているか」「まだこの街には入っていないがもうすぐ来る」男は外にかけ出して行った。私たちはどうしてよいかわからず、父の指図を待った。「ようしみんなこのまま逃げよう、大きな荷物は大家に預かってもらおう、できるだけ貴重品だけにして荷物は捨てたがよい」。実は機会を見て内地に送るよう、大小の荷物が積み上げられていたが、そんなものが持てる状態ではなかった。全くの着のみ着のまま。しかし着れるものは重ねて着たがよいというのでセーター、ズボンの上に中国服という格好で重ね着しているとき、裏口より頼みの大家が2、3人の男達を連れてきた。「高崎先生、早く家の倉庫に隠れなさい。荷物は

私たちが運ぶから」とせき立てながら導いてくれた。

言われるまま大家の家の穀物倉庫にたどりついてホッとしたとき、遠雷のようなざわめきの声がまるで津波のように響いてくる。それは10人や20人の足音ではない。やがてわめき声やかん声が近づくと、何やら崩壊し倒される音、街のすぐそこまで民衆がおし寄せて来ているのがわかった。倉庫の中はむし風呂のように熱い。しかし高粱や唐もろこしの袋の間に首をつっ込むようにして暗い中に息を殺していた。この家の後方は河原に通じていた。琿江か大きな河が流れていたようだ。そのとき、怒号と地響をたてて民衆が掠奪した品物を河原に運ぶ様子が倉庫の横の道をはしるのでわかった。私のお琴であろうか何かにぶつかってポーンと音をたてていた。

どのくらい経ったのであろうか、外は真暗で潮の引いたあとのように静かになった。大家が戸を開けて入ってきた。「今男たちが様子を見に行っていたが、東寧あたりからも日本人の男女が何十人も裸のまま逃げて来ている、公安の官舎に集まっているから行きなさい。暴民は石人（地名）に向かった」と言うのである。父は、28年も大陸の生活をしているので中国語は方言までしゃべれて、「父親か母親かどちらかが中国人だろう」と言われるくらい土地の人達からも信頼されていた。趙というこの大家は八道江の有力者で、後で知ったのであるが抗日ゲリラを指導した壮々たる人物であった。「集団で行くのは危険だ、バラバラになって間を置いて行った方がよい」と趙さんの言葉で、月の明るい道路を避けて軒下を伝いながら、それぞれ2kmもある公安委員会（警察）に向った。若い夫婦の組は逃げるのも素早かった。私は両親と弟たちの後を少し離れて歩いた。

途中で両親たちの姿を見失った。方角もわからなくなり、不安で思わず曲り角を曲って軒下にかけて込んだとき銃声がした。みると50m程はなれた四辻のところで、父たちが5、6人の男たちにとり囲まれてこづかれています。一人は銃を父に突き突けている。あたりの商店街は全部戸を下している。母のふところから大切な貯金通帳や現金、お位牌などを入れていた白い袋が奪い取られている。弟たちまでこづかれています。私は突嗟に公安に行こうと決心したが、商店の戸にへばりついたまま様子を伺っていた。月の明かりはこうこうとしていたので、かえって私の姿は見えなかったらしい。すると後ろから戸がギーと明けられた。私の体は土間の中に後ろ向きのままトントントンと入ってしまった。呼吸が止まるのではないかと驚愕で胸はふさがってしまった。無言で見つめている男の顔、それも2人である。奥は真暗で様子がわからない。やっとの思いで「私は日本人だ、警察にはどう行けばよいか」と聞いた。「おまえは日本人か！！」と言ったきり、足元から足を見上げ見下ろしていたが、後は何も言わない。手も出さず、心意も伝わらない、私の不安は募るばかりだった。思わず意を決して外に出る。男たちは追っても来なかつたのでホッとした。

私は軒の暗がりやを伝って警察にたどりつく。八路軍が門の所に立っていた。「助けて父親母親が殺される」としがみつこうようにして言うと、「どこだ」と一人が言った。「那邊児」と振りかえって指をさそうとしたとき、よろよろしながら両親や弟たちが歩いてくるではないか！。

涙が出て止まらなかった。父は上着もなく眼鏡も落としたのか、かけていなかった。母は放心したように、それでも足の悪い末弟の手をがっしりと握っていた。私達はそろって中に入った。どこから逃げて来たのか裸に麻袋を着た人、パンツだけの男の人、ザッと見回しても100人以上の避難民が汚れ、疲れ、血を流して、うずくまるようにして、たむろしているのである。

それから2ヶ月間あまり、200人以上にふくれあがった日本人が共同で避難民収容所の生活することになった。6畳の部屋に30人が折り重なるようにして寝ることになった。お風呂は2週間に1度位、汚れた湯あかはすぐ風呂いっぱいになり、かえって汚い。しらみはいつのまにか誰の身体にも生息するようになった。私は頭を五分刈りにされ、鍋の墨を顔のあちこちにつけ、黒いつぎはぎの満州服を着せられた。巡視してくるソ連兵や八路軍に娘であることを知られないために。おかげで、折り重なって寝るようにしていた所からワラやアンペラを敷いて比較的到手足の伸ばされる物置へ、公認で移してもらってよかった。だが夜は、オンドルがないため、しびれるような寒さがワラを通して突上げてきた。

200人からの難民のため、中国共産党は食糧を支給したが、到底あたりまえの食事はできない。親たちは地元の富有な農家や商店に働きに行った。1日10円位だと思うがお金と少々の作物を貰って帰ってくる。食事は共同で何班かに分かれて作っているが、粟やジャガイモ・ナッパなどの塩味の雑炊に米粒が浮いているような、初めにつぐと汁ばかり、後になると実は多いが砂も入っているというので叱られた。というのは中年以上は外に働きに出るが、若い女性は危ないというので病人の世話や掃除、炊事をしなければならなかった。男たちは敗戦のショックで放心したように目標もない避難所暮らしに、日中はぼんやりとしらみばかりとっていた。

ある夜、父は私たちに五道江に脱走するからと言った。父を先頭に30名程の男女や子供が積雪30cm、大方が氷になって凍てついていた12月の夜、荷車とそりにのって八道江を後にした。五道江鉱業所の磯野所長は父の撫順時代の盟友だった。

八道江を脱出して後1年、私たちは五道江で生活することになるが、敗戦後引揚げてくるまで様々な苦難の道を日本人はさまよい、そして味わった。お国のため侵略の片棒をかついだ父や家族の遠い満州での生活を時には懐かしく思い出すのはなぜだろうか。